

一九九九年十月、アクトシティ浜松展示イベントホールで「水俣・浜松展」が開催されました。主催したのは水俣・浜松展実行委員会。前年八月、豊橋市で行われた「水俣・豊橋展」に心を動かされた人々を中心超す有志を募り発足させた団体でした。

実行委員会は、浜松NPOネットワークセンターを拠点とし、その準備に一年近くかけました。実際に九日間の開催中に七千人余の入場者があり、市民だけで企画運営したとは思えない規模のイベントとして大成功を収めました。

その実行委員会で大活躍したのが池谷雅子さん。彼女はその後、「水俣・浜松展」での経験から「いのちとはなにか」、水俣を通して子どもたちに伝えることの大切さに気づき、他の地域で同様に開催された「水俣展」の仲間達と一緒に「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク（伝えるネット）を立ちあげました。

実は、「水俣・浜松展」において、社会科教科書で「水俣病」について学ぶ小学五年生を招待し、十数校の子どもたちに水俣で起こうたことを直接語りかけることをしていたからです。

被害者の言葉「水俣病事件は人が人を人と思わなくなつた時に始まつた」、胎児性水俣病の我が子を「宝子」と言い、みんなで大切にして生活した家族のことなど…。子



プロのカメラマン達が撮った水俣の写真を持参し行う小学校での出前講座



水俣の無農薬夏みかんを前に写真集をのぞき込む子どもたち



パリアフリー写真展で写真家・芥川仁氏から説明を受ける観覧者たち



取材・文/  
特定非営利活動法人  
浜松NPOネットワークセンター(N-Pocket) 代表理事  
井ノ上 美津恵さん

学習塾を20余年主宰。'89年、台所から環境や平和を考えるグループティオ設立。盲学校での講師経験が契機となり点認ボランティアや養育里親など福祉活動も開始。'97年、N-Pocket設立に関わり、主に障害と情報をテーマにした事業を担当。'07年1月より現職。

からだそうです。池谷さんたちは、パリアフリーアート展について調べ、視覚に障害がある人と一緒に写真を楽しむという試みで、写真的印象や感想を文章にし、それを点字にしたものも用意したそうです。その試みは、「二〇一〇年二月に」伝えるネット・首都圏「が主催した『水俣』を見た七人の写真家たち」相模原展に引き継がれました。そこでは、音声ガイドなど、より多様な技量

をもつボランティア団体に関わっていました。お互いの活動のネットワークを強化する副産物もあつたそうです。

こうした新たな視点で活動を拡げることでできたのも、「伝えるネット・浜松」のメンバーに視覚障害がある人がおり、団体として障害の有無を越えた活動を実践していくから成し得たことではないでしょうか。

池谷さんはこういいます。「水俣病は公

式確認から五十数年経ちます。私たちには未だ解決していない水俣病事件の事実から、人としての生き方、社会のあり方など、多くのことを学ぶことができます。地縁・血縁がない私たちだからこそ、同じ生活者の地平にたって人間的想像力を働かすと、自分の街の自分の暮らしへの学びだと気づきます。その「気づき」が活動の原動力になっているのです。」

どもたちは真ん丸な瞳で、真剣に話を聞いてくれました。このとき、「水俣病事件は大切なことを教えてくれる。大切なことは私たちの身近な子どもにこそ伝えたい」と池谷さんは強く思ったそうです。

現在、「伝えるネット」は、札幌、首都圏、豊橋、浜松に窓口を持ち、それぞれのスタンスで活動を行っているそうです。主な活動は出前授業で、小中学校や高校に出かけ、「水俣病事件」について話すこと。それらの授業では、子どもたちと共に考えるよう心がけ、そのため、水俣病関係のシンポジウムなどに参加し、被害者の話を聞いたり、水俣現地での研修を行ったりして、自分たちの日々の学びも大切にしているそうです。二〇〇六年に田尻賞を受賞しているのも納得です。

池谷さんが代表を務める「伝えるネット・浜松」では、二〇〇〇年の発足以来、毎年三学期になると必ずお呼びがかかる授業があるそうです。出前先は浜松市立入野小学校五年生。五年生担当の先生が年間計画に「水俣」を組み込んでくださっているから、と伺いました。

また、二〇〇八年六月には、豊橋と浜松で、「水俣」を見た七人の写真家たち」写真展を開催。このときは、「視覚障害のある人にも見える写真展」として企画し、大きくメディアにも取り上げられました。普段から、視覚に依存する写真で伝えることが前提になっている活動にパリアを感じていた

中間支援NPOの方が  
地域で活躍する方々を紹介

## 第8回 生涯学習を仕事にする

# 水俣からの気づき「いのち」を 子どもたちに伝えたい

「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク・浜松 代表  
**池谷 雅子さん**